

〔伊呂波字類抄末〕貧マツシ也古作マツシ、飲マツシ、匱マツシ、備同上

〔倭訓栞後編十六〕まづし 貧をよめり、俗にまづくにするといふ詞によれば苟且の意より轉

せしにや、貧すれば鈍するといふ諺は、朝野僉載に、人貧智短、馬疲毛長と見えたり、貧は病より苦

しといふは、古詩に、富貴他人合、貧賤親戚離と見えたり、貧諸道の妨げといへる諺も同じ。

〔倭訓栞中編二十四〕まどし 貧をよめり、まづしに同じ。

〔倭栞訓前編十八〕ともし 乏字をよめり、とぼしともいへり、字の如く稀少の義也。

〔倭訓栞中編二十一〕びんぼう 貧乏の音なり、乏を俗にはくとよむは誤也、びんぼうがみは虚耗鬼

なり。

〔日本書紀二十九〕八年二月壬子朔、是月降大恩恤貧乏。以給其飢寒。三月壬寅、貧乏僧尼施綿布。

〔古事記上〕於是探赤海鯽魚之喉者有鉤、即取出而清洗奉火、遠理命之時、其綿津見大神誨曰、以此

鉤給其兄時、言狀者、此鉤者游煩鉤、須鉤貧鉤、宇流鉤云而、於後手賜於煩及須々亦、然而其兄作高

田者、汝命營下田、其兄作下田者、汝命營高田、爲然者、吾掌水故、三年之間、必其兄貧窮中、是以備如

海神之教言、與其鉤、故自爾以後稍愈貧下。

〔日本書紀神代二〕一云、於是進此鉤于彥火、火出見尊、因奉教之曰、以此與汝兄時、乃可稱曰、大鉤、跟

踰鉤、貧鉤、癡駿鉤、言訖、則可以後手授賜中、又教曰、兄作高田者、汝可作洿田、兄作洿田者、汝可作高

田、海神盡誠奉助如此矣、時彥火、火出見尊、既歸來、一遵神教依而行之、其後火酢芹命、日以檻樓而憂

之曰、吾已貧矣、乃歸伏於弟。

〔續日本紀十一〕天平五年閏三月戊子、諸王飢乏者二百十三人、召入於殿前、各賜米鹽、詔責其懶惰、令

治生業。  
〔類聚國史七十八〕弘仁十三年七月丙申、以新錢一百貫、班給諸王貧者。